

「ウエルカム トウ 石鳥谷！」

こんにちは！お元気で過ごしてはいかがでしょうか？ 何やら今回は文章が多い気がしますので、私のほうは大きめの字で、ご案内を書かせていただきます。

毎年夏場になると各所で酒造技術研究会（講習会）が開催されておりますが、今年は南部杜氏協会の夏季酒造講習会が百回を迎えます。この記念すべき節目の年に「醸造機器用品展示会」が併せて開催されることとなりました。以前は酒造大会が3年ごとに地方で開催される時に併せて醸造機器用品展示会も大々的に開催されておりました。私が最も印象に残っているのは、秋田の総合運動公園での展示です。結構大きなスペースを取り、大小様々なサイズのサーマルタンクやステンパネル式麹室などを展示し、商談スペースではお茶やジュースなどの飲み物とお菓子を用意して、来場いただいたお客様とお茶を飲みながら雑談を交え商談したものです。

その頃は今に比べればまだゆったりとした時が流れ、ゆとりがあったように思います。ところがだんだん余裕が無くなり、残念ながらこのような醸造に関わる業者が一堂に会しての展示会は開催されなくなりました。

今回、銘醸機械さん、塚本鑛吉商店さんのお骨折りにより、久しぶりに開催の運びとなりました。開催地は岩手県花巻市です。少々遠方ではありますが、（お近くの方、ごめんなさい！）是非お時間を取っていただき、足をお運びいただければ幸いです。

「ウエルカム トウ 石鳥谷」石鳥谷の地にてお越しをお待ち致します（少々不完全燃焼…）

というわけで、今回は何のおチ？もなく終わらせていただきます（少々不完全燃焼…）

日時 7月28・29日 午前8時半～午後4時

会場 岩手県石巻市石鳥谷町中林寺6-92-1 石鳥谷アイスアリーナ

日本の野鳥シリーズ

軽量記録の樺太虫喰

技術営業部 佐藤 弘

山階鳥研の著書「鳥の雑学事典」（日本実業出版社）によれば、世界最軽量の鳥は体重2gつまり1円玉2枚の重さのハチドリという。これには及ばないが、4.6gのカラフトムシクイというウグイス近縁種のとにかく小さい鳥を捕獲した。私が参加する調査地、新潟市関屋海岸の軽量記録だ。

一見して頭は銀杏より、胴体はウズラの卵よりほんの少し大きく、それに嘴と翼と尾を付けたと思うほどだ。こんな吹けば飛ぶような小鳥も総重量300t超のジャンボ機も、空気より重いものが空中を飛行できる原理は全く同じだ。と言うより人間が鳥から学び、まねた事だ。

翼に作用する揚力は翼の下面と上面に分けて考える。下面は凧が揚がる理屈と同じで風によって翼が押し上げられ、一方湾曲した上面は曲面に沿った気流が周りより速いことで気圧が下がるから、翼が吸い上げられる。上下合せて4.6gなり300tなりの揚力が生じて重量と釣り合い、これだけの事でスピードが下限を切る、いわゆる失速しなければ墜ちる事はない。

頭では分かっている、飛行機にはやむを得ず乗るのであって全く好きになれない。腹をくくって搭乗し、席を探すとそれが主翼上への脱出口という事が何度かあった。その都度私の頬は少し緩んだかもしれないが、万一の際イの一番に機外へ脱出できるからではない。その節は沈着冷静に乗客避難の手助けをよろしくと、席割りをする搭乗受付のお嬢さんが思いを託したのだと勝手に解釈するからだ。根拠はない。搭乗券を私に手渡すお嬢さんが確かに目でそう言ったし、ご老体や子供が非常口を預かっている便には乗った事がない、というにすぎない。

ある日の伊丹空港。いつもの3倍以上の高さで滑走路に進入した搭乗機が、強引に着陸し予告もなくオーバーラン回避の急ブレーキをかけた。尻が座面を滑り前席に顔を打ったが、粗い操縦を詫びたり怪我はなかったか安否を気づかう乗員のアナウンスは一切なかった。彼らも声が出せなかったようだ。

「あんなものには絶対乗らない」と言うお方を少しも臆病だとは思わない。

“ちょっと一息”

生産部部长 山本 知男

ある日突然に会長から「酒蔵さん頑張ったのエッセイ、次からは山ちゃん書いてよ。」って言われて、「エッ、何ですって。いや無理です！」って言っても、当然聞いて貰えず、脳味噌に脂汗流しながら悪戦苦闘しているところです（涙）。

仕事柄、報告書とか議事録なんていうのは割りとすんなり書く方ですが、エッセイって言うのはどうも、小学校の時から作文は苦手なもので・・・、と言う事で何を書こうかと悩んだ結果、やはり好きな事を好きなように書かせて貰おうと開き直りました。

まずは自己紹介も兼ねて私の好きな物をご紹介します。1番目はお酒（ちょっとお客様を意識しちゃったかな）。若い頃は日本酒はあまり呑まなかったのですが、この会社に入社してからと言うもの、大吟醸酒、生酒、純米酒等々、こんな美味しい物ならもっと早く呑んでおけば良かったと思ったものです。

今、我が家の晩酌では必ず日本酒を呑んでますが、これのウンチクに関してはちょっと書けないですね。（汗）

2番目は音楽。中学校以来 40 年ちょっとクラリネットを続けています。中学の時に吹奏楽部にちょっと見学に行ったのが運の尽き。ハマってしまって今でも続いている状態です。酒とクラリネットでストレス解消！というところでしょうか。

3番目は奥様。（本当は女って書きたい所ですが、それではちょっとマズイかなと・・・）それでも何で1番じゃないの？って怒られそうなので、この文は決して見せられません。（かなり尻に敷かれてます(^_^)）

この3つの話題を中心に“ちょっと一息”入れて頂ければなあ、という感じでスタートさせたいと思っています。どうぞ気晴らしに見て下さい。

さて、気晴らしと言うと、3月末頃に私の知人が“気晴らしコンサート”を行いました。新潟には今回の東日本大震災や原発事故の関係で避難されて来た方々が大量いらっしゃいます。その避難場所は体育館とか公共の場所になっているので、当然普段通りの生活にはなりません。集団生活の中でストレスを抱えたりして精神的、肉体的にも苦痛を感じておられる方が多いようです。

そこで音楽で気晴らしをして貰えればという発案で知人がコンサートを開きました。私にも手伝いに来いという連絡があったのですが、残念ながら仕事を休む事が出来ず失礼してしまいました。

私はアマチュアですが、その人はプロで楽器の腕はもちろんの事、観衆の盛り上げ方とか非常にうまくて、いつも感動させられていてやっぱりプロは違うなと感じさせられる人です。この時も避難されて来た人達が涙を流したり、手拍子を打ったりして、しばし和やかなひと時を楽しんでくれていたとの事。この次の機会には是非お手伝いさせて貰おうと思ったものです。

震災直後は自粛ムードもあって、私もちっちゃなコンサートでしたが、一つ延期をしました。でも気晴らしコンサートの話を聞いて、自粛する必要もなかったかなと思いました。

音楽は気持ちを和ませます。ましてや生演奏と言うのは音を肌で感じる事が出来ます。スピーカーを通して聞く音は小さな音、大きな音としか響きませんが、生の音は小さな音でも肌に心に染み込んで来て鳥肌が立つ事があります。心のこもった演奏をすれば尚の事、喜んで頂けたかと思えます。

ま、私はまだまだ未熟なんですけど・・・ 結構長くやってるんですが、高校生辺りと良い勝負しています。おかげで精神的にいつまでも若くいられますけど（笑）。と、まあこんなところで今回は失礼します。

◆ ちょっと豆知識 ◆ その9

技術営業部課長 成田 護

先般、酒造技能士の一級を受験しました。結果は、学科 94 点（50 問中 47 問正解）、実技 79 点で無事合格でしたが、これまで「試験」と名の付くものの中で、一番自信の無い試験でした。

これまでも二級の試験はパスしていましたが、どちらかというに興味があって受験したというよりは、前の職場のしきたりにならって受験したものであって、その後も特に一級の受験を考えたことはありませんでした。では何故今回受験したのか。

一つは、どこで聴いたのか定かではありませんが、技能士制度が事業仕分けの対象となっていて、ひょっとすると運輸大臣にバツサリ切られてしまうかも知れない、技能士の資格を取るなら今しかない、的な噂を耳にしたこと。興味深い事に、新潟のある若手杜氏も同じような噂を耳にし、全く興味の無かった技能士試験を受験することにしたとの話を聞きました。

もう一つは、名刺に「酒造技能士一級」の文字があれば、初めてお会いするお客様の興味を引くのではないかという邪（よこしま）な考えから、です。

先にも書きましたが、合格発表の日を、これほど重い気持ちで迎えた試験はこれまでの人生においてありませんでした。

新潟県酒造組合主催の事前講習等を受け、準備万端とまでは行かないまでも、学科についてはそれなりの準備をして試験に臨んだ訳ですが、参ったのは実技試験の方でした。

きき酒（10 種類）、酒母の使用可否判定、麴の老若判定など、官能評価を伴う試験がいくつか用意されており、過去の経験と知識の蓄積もあるし、まあどうにかなるさと試験に臨んでみれば、あまりの難解さに嫌な汗をかいて控え室に退散してきたのを今でもありありと思い出すことが出来ます。

普段から自宅での晩酌時にきき酒っぽいことをして、自分では鼻とペロのトレーニングをしているつもりでしたが、やはりそれは、仕事として日々実践している人たちに比べるべくもないことを痛感した出来事でした。

酒類の製造に携わる人たちの目、鼻、舌、それらを統合する「頭」の確かさは、一朝一夕に得られるものでない。それは自身でも分かっていたつもりでしたが、その維持にもまた、膨大なエネルギーが費やされる必要があることを改めて感じました。

「継続は力なり」。日々の鍛錬の重要性はあらゆる世界で共通なようです。

名前はりゅーと・・・でもなあ

エッセイ

生産部主任 島貫 修一

待ちに待ったバスの IC カード乗車券の利用が新潟でも始まった。

カードの名前はりゅーと（柳都）。三文字で母音が「あ」で終わる名前が多い他の IC カード乗車券と比べれば響きの心地良い名前だと思うが、問題が隠れていた。Suica が使えない。新潟の JR は Suica の利用可能エリアなのだから、バスも最初からりゅーとと Suica に互換性を持たせれば、一枚のカードで鉄道もバスも乗れる。それなのに Suica は平成 25 年の春まで待ちぼうけ。東京とその隣接県では Suica と Pasma の相互利用サービスにより、一枚のカードで JR も私鉄も地下鉄もバスも乗れる。この利便性の高さをバス会社は知っているはずなのに。（江ノ電も乗れたし、また乗りたい）

ここまでこだわるのは街中探検の足である路線バスに、愛用の Suica でポケットの小銭を心配せずに乗りたいため。車では駐車場以外に止められない狭い道に入れない。バイクなら問題ないが、路地を歩く時は押して（車体重量 140kg）歩かねばならない。路線バスなら運転しないで済むから走りながら周囲を観察できるし、気に入った所で下車して歩き回ってから停留所に戻り、またバスに乗って先に進める。しかし小銭の用意が大変だ。後ろ乗り前降り下車時に運賃表を見てから硬貨を数えて払うが、これを途中下車の度に繰り返すのは面倒だし、硬貨でポケットが重くなる。

IC カードの乗車券や電子マネーの普及が進むのは便利で歓迎するけど、全国どこでも使える互換性や相互利用サービスは、利用者にとって必要不可欠の機能だと思う。柳都は新潟市の雅称です。